

「昨日」と「これから」、授業の導入におけるひと言

京都女子大学教授
吉永 幸司
よしなが こうし

一 導入がまずかった？

若いころ、自分の授業で気がついたことを綴った「実践記録」の中に書き留めていた文章です。

今日はどんな勉強をするのだろうと、期待に胸を膨らませ、身を乗り出す子どもが多ければ授業の導入は大成功。

授業の始まりに「昨日はどんな勉強をしましたか。」と言うのと、少し工夫して、「今日は、おもしろいことを勉強するんだよ。」と言うのでは、子どもたちの心への響き方に違いがある。

どの子どもにも、今日の授業はおもしろそうだ、自分は主役になれるそうだ、という期待をもたせるような工夫が必要である。

幼児の場合は、「子育て教室」と名付けられ、母親の育児支援を兼ねて遊びます。そこでの遊びは、風船やボール、おにごっこなどの簡単なものですが、幼児は、一つの遊びだけに満足することはありません。遊びに飽きると、

「次、何をするの。」

と聞き、「次の遊び」を探します。

高齢者は「ふれあい広場」という交流の場で、お茶を飲んで話したり、食事をしたりして交流を深めます。高齢者に、

「来月は、どんなことがしたいですか。」

と「これから」のことを話題にしても、それほど話は盛り上がりません。それどころか、

「来月のことなんて、今からわかるものですか。健康でいるかどうかかわからないのに。ハハハ…」

と話す方もいて、そつけないものです。しかし、過去の話になると違います。

「あのときの弁当はおいしかった。桜はきれいだった。」ほとんどの方が生き生きとした表情で話し、話題が弾みます。

そうしたやりとりをよく聞いていると、「あのとき」が二年、三年前のものであることが珍しくありません。

これは、幼児と高齢者が生きていくうえで、エネルギーにするものが違うのではないか、と思ったので、わたしが教える大学生たちの話題に注意をしてみました。学生たちは、

勢い込んで指導に臨んだ研究授業で子どもが少しも動かず、自分の思いだけが空回りをしてしまったのです。その原因を探っていくうちに、「導入がまずかった」と気づいて書き残したという記憶があります。

この事例に限らず、日々の授業で、

「昨日のことを思い出しましょう。」

「昨日のまとめをしましょう。」

と働きかけても、挙手をする子は限られていて盛り上がりが出ていたと思うことがたびたびありました。そのときは納得してまとめたのだと思っていましたが、最近、それはつきりしました。

二 エネルギーのよりどころが世代によって違う

しばらくの間、地域で民生児童委員を委嘱され、幼児や高齢者とかかわる機会がありました。民生児童委員の仕事には、幼児や高齢者と遊んだり話をしたりすることがあります。

「今日の四時間目の講義、どうする。」

「今日のバイトどうしようか。」

など、「今」をエネルギーにして生きていることがわかってきました。それぞれの世代がエネルギーにしているものには違いがあるとわたしは思うようになりました。

幼児が「これから」、若者は「今」、そして、高齢者は「過去」をエネルギーのよりどころにしているのではないのでしょうか。

三 「次、何をするの。」に應える導入を

教室の子どもたちの言葉に注目すると、

「先生、次の理科の時間、何をするの。」

「明日の読み聞かせでは、何の本を読んでくれるの。」

という「次」や「明日」という未来の方向へ目が向いていることに気づきます。

子どもの勢いを感じた授業は、

「今日はおもしろい話から始めようね。」

と、その導入で、わたしが「これから」に向けた働きかけをした場合が多かったように思います。

「今日は…」のひと言を言うだけでも、授業って変わるのだなと感じながら、あらためて若いころのノートを読み返しています。